

園長だより NO30

新年を迎え、あつという間の1か月、生活も安定し子ども同士のコミュニティーもより結びついてきたように思えます。

あと2週間余りで以上児の劇の会(4, 5歳)劇遊びの会(3歳児)があります。それぞれのクラスがお話をもとに役になりきりながら遊んでいる姿が見られます。4歳、5歳児は劇あそびの段階からホールの舞台で取り組むようになり友達(大人)に見てもらうことを意識します。保育室で遊んでいる時と比べるとホールではスペース(空間の使い方)、登場の仕方(子どもの動線)役同士のやり取り、声の強弱や大きさなど取り組みの中で子ども達は気づき、新たに考え取り組む課題が出てきます。

大人(保育士)が活動の中で起こった問題や新たな気づきに対して、援助や解決への糸口を示唆することも保育士として当然、行うことですが、まずは子ども達にゆだね、考えてみる、子どもなりの思いや発想をまずは表出させて自分が主体になり取り組んでいることを意識させてあげるように取り組んでいます。

ただ、舞台の使用により遊び(遊戯性)の部分がそがれてしまうことが保育士の悩みでもあります。

舞台を使うことについてくる課題と言えるでしょう。日常、遊んでいるものが自然体できるような劇の会のあり方を考えていくことが現在の課題です。

子ども達のこだわり

劇の取り組みの中で毎年候補としてあがるお話の中に「さるとかに」「さるかにがっせん」があります。



十数年前、都内の幼稚園であった出来事です。「さるとかに」に登場するものに猿、かに、うす、くり、はち、牛の糞(ふん)があります。

クラスで役を決めた際、さるやかによりも牛の糞(ふん)が人気で数名の子どもが立候補した。子どもにとっては牛の糞はさるをこらしめるために必要な役とみんなが思ったと言います。

「さるは牛の糞を踏みつけないと転ばない」

「さるがつるっと滑って、転んで」

「うすどんがドッシーンとのっかる」

だから牛の糞が必要なんだよと子ども達は言う。

子ども達の話し合いにより牛の糞役が決まり、一人の男の子が家に帰り、母親に伝えた、母親は我が子の思いをよそに、すぐに担任へ連絡、「うちの子が牛の糞なんて! そんなものになるなんて許せません!」と大変ご立腹、さるやかにの役になるだろうと思っていた母親は怒りをぶつけてきたという。

担任は丁寧に母親の感情に寄り添い子ども達の取り組みを説明した。そして、我が子の牛の糞役への思いを丁寧に母親に聞いてあげてほしいと願いを伝えた。

翌日、母親は穏やかに、我が子の牛の糞役が楽しみですと担任に伝えてきたそうです。

糞、うんちと聞くと大人の概念があまり好ましくないものと思いがち、でも子ども達には牛の糞は大切な役であり、除くことができない役であったのです。

次は東京郊外の幼稚園のはなし、これも「さるとかに」です。役決めの際、牛の糞役に立候補者がいなかった。

「糞なんて汚いし やりたくない」

「うんちって言われるから やだ」など

「糞役がない おはなしにしたらいい」

という意見もでる。

「さるとかに」の劇にでない子どもの一人が「牛の糞がないと劇にはならない」

「だれか やってくれない」と願いを伝える。

友達が演じる「さるとかに」の劇をみるのが大好きという子どもである。

数日、役を引き受けてもらえないかと交渉を続けたという。友達との話し合いでも牛の糞の大切さを伝え続けていたという。

数日の交渉や話し合いで数名の子が引き受けてくれた。

多くの時間を費やしただけに劇はしっかりと子ども達のものになっていたという。



2019.2.4

今年のめろんぐみは「さるとかに」をやることになった。

私はいの一番で担任に「牛の糞役はいるの」と聞いてみた、「いますよ ○○くんです」

それを聞いてほっとした。子ども達にお話を大切に読み聞かせ、話をもとに遊びこんでいることが伝わってきた。

何事も大人の概念での判断は避けたい。子ども達がどう感じ、どうとらえているのかしっかりと受け止めてあげたいものである。

話ほもどりますが都内の幼稚園では劇の会後に「うんちについての研究所」と題して子ども達がいろいろと調べ始める遊びが展開されたそうです。

子ども達の研究では

「うんちは汚くないもの」

「うんちがでるのは元気なしるし」

「うんちでびょうきがわかります」

「はやね、はやおき、あさごはん

それと あさうんち」

というように子ども達の研究成果は今も語り継がれるエピソードです。

2つの幼稚園の事例は共に子ども達の思いや取り組みに寄り添い、できるだけ子ども達で劇を作り上げていくプロセスを踏ませてあげたいと願うもの、子ども達を導き、育てることも大切だが子どもから学び、子ども達にゆだねることも共に大切である。

(園長 廣部信隆)